後期メルロ＝ポンティにおける「沈黙」の位相

――『見えるものと見えないもの』における「前言語」に着目して

三宅 萌

はじめに

メルロ＝ポンティが常に喚起してきた哲学的主題の一つである「未だ黙した経験を意味の純粋な表現へと導く」という試みは、従来、言語論の文脈において、沈黙から言語（表現）への移行ないしその循環関係として整理されてきた［註1］。遺作となった『見えるものと見えないもの』や同時期の研究ノートにおいても、「語りつつある言葉（parole parlante）」［註2］による沈黙から言語への移行が問題化されているが、それはこの問題がメルロ＝ポンティ自身の理論的態度、すなわち、哲学者は直接的なものとの合致によってではなくあくまでも言葉を用いることによって真理を実現するという態度と関係するものであるからに他ならない。後期メルロ＝ポンティにおける「沈黙（silence）」の内実については先行研究内で幾らかの異同が存する［註3］ものの、理論図式としては沈黙と言語

の二項関係として整理される傾向にある。確かに、「哲学は沈黙と言葉との相互交換」(VI, 169/178)であり、また全ての哲学は「その本領が沈黙を見出すことにある」(VI, 263/307)といった記述を鑑みれば、沈黙と言語という二つの鍵語を中心に彼が思索を組み立てていたことは想像に難くない。

しかしながら、沈黙と言語の二項図式では十分に説明できない記述が見られることも確かである。例えば『見えるものと見えないもの』「問いかけと直観」には次のような記述が見られる。これは、沈黙を言語へと至らしめるような「語りつつある言葉」の特徴を整理し論じた上で、言語を用いることで反省以前的なものを分析することが方法上可能であることを述べた箇所である。

> 哲学それ自身が言語(langage)であり、言語に基づいている。だが、だからといって哲学は、言語について語る資格を失うわけでも、前言語(pré-langage)、そして言語と前言語を裏打ちするところの無言の世界(monde muet)について語る資格を失うわけでもない(VI, 166/175)。

ここでは、哲学的言語によって沈黙を語るという言語実践において、三項の存在が念頭に置かれていることが指摘できる。すなわち、言語、前言語、無言の世界[註4](沈黙)であり、無言の世界は言語と前言語の両方を下支えするとされる。この箇所で、沈黙と前言語が区別されていることは明らかであり、前述の「沈黙」概念の異同を含め、後期メルロ=ポンティにおけるこれらの用語法を整理し明確化する必要があるだろう。

そこで本稿では、『見えるものと見えないもの』を中心とする後期哲学における沈黙の内実を明らかにすると共に、「前言語」という審級の理論的位置づけとその意義を提示する。まずは上記引用文の記述が導かれる直前でメルロ=ポンティが行う、哲学をなすための「語りつつある言葉」についての議論を整理する(第一節)。その後、無言の世界(沈黙)における文化的既得物の位置づけに関して、生活世界の二義性の議論から分析・議論した

上で（第二節）、前言語と沈黙、言語という三項の関係を明らかにする。それを踏まえ、沈黙と言語の二項関係に、前言語という項を導入することの哲学的意義を述べる（第三節）。

1 「語りつつある言葉」と沈黙との関係

『見えるものと見えないもの』「問いかけと直観」において、メルロ＝ポンティは自身の哲学的方法論を取り上げる。そこでは、「我々が反省や批判の過程の沈殿物を携えている以上」（VI, 160/169）、つまり、我々は言語という夾雑物を通してしか物事に到達することができない以上、直接的な存在へのアクセスは原理的に不可能であること、しかしそのような「隔たり（écart）」（VI, 163/172）にも関わらず哲学者は真理を実現することができるということの論証が試みられている。そこで使われている言語こそが、語られた言葉（parole parlée）に対照されるところの語りつつある言葉（parole parlante）［註5］であり、それは次のようなものである。

> 語りつつある言葉を取り上げ、［その使用においては、］ラングのうちに生きている人がラングの諸規約を自然的なものとみなしており［①］、彼においては見えるものと生きられるものとが言語（langage）に巻きつき、また言語が見えるものと生きられるものとに巻きついているというその事態、また彼の見る無言の風景の分節と彼の言葉の分節との交流［②］、最後に、意味や思考へと翻訳される必要のない作動しつつある言語［③］［…］を考察するならば、そのようなロゴスこそは、絶対に普遍的な主題となるのであり、それが哲学の主題なのである（VI, 165-166/174-175）。（［］内挿入は論者による。）

この箇所から我々は、「語りつつある言葉」が三つの特性のもとで実現されることを読み取ることができるだろう。順に解釈していこう。

一点目は、「ラングの諸規約を自然的なものと見なす」性格である。例えば日本語話者は、それがごく日常的な会話の場面であれ、論文執筆や愛の囁きの場面であれ、語ろうとする内容と語ろうとする語や表現との適合の具合を意識することはあっても、その文法規則を意識化することはないだろう。このように、語る・書く主体が言葉を用いる場合、彼（女）は自らの言語の統辞の体系を自明視しているということを指す①。

二点目は、言葉を話す人間にとっては「見えるもの・生きられるものと言語とが互いに巻きついて」おり、そして「無言の風景の文節と言葉の分節とが交流している」と表現される事態を指す。前者から解釈していこう。

まず当然のことながら、主体の語る言語とは、主体が見たものや経験したものそれ自体がどのようなものであったかに適応するように語られるものである。他方でその言語は、発せられたことによって主体における言語の総体を変容する。それによって、主体が見て、生きるという経験のあり方に影響を与え、規定する。このように、経験されるものと、経験を語る言語とが互いに影響関係にある。

そうした影響関係は、「無言の風景」の自発的な形態化と、主体における「言葉」の分節化という領域においても生じている。強調しておきたいのは、知覚される風景（世界）［註6］の側にも、主体に対し働きかけるある種の分節化の作用を認めている点である。言い換えれば、知覚された風景に対する言語的な分節化の侵襲のみならず、風景の側にもある種自発的な形態化、主体に対する分節化の要請をも認める。その上で、この両分節化の作用が拮抗し関わる（「交流する」［註7］）場面において、語りつつある言葉が実現されると考えて良いだろう②。

そして三点目は、語りつつある言葉が「意味や思考へと翻訳される必要のない作動している言語」だということである。話者や筆者がその言葉によって言い当てようとしていることは、逐一、主体が言語的に表現する以前に十全に保有し、それを翻訳するといったものではない。むしろ、まさに発話中に、発話することにおいて把握

される。それゆえ、「語りつつある言葉」とは、辞書的な意味や説明への翻訳を逐一要求するものではない(③)。

語りつつある言葉とは以上の三点の特性によって特徴づけられるものである。そして、こうした特性を持つ言葉について考察することこそが、沈黙と言語という二元論をめぐるメルロ＝ポンティ哲学の方法上の困難を解決する要であり、また哲学的主題となる。

この三点の性格は、メルロ＝ポンティの言語論に関する文脈で周知の事実と思われるかもしれない。しかし、ここで我々が特に注目したいのは、次の三点である。すなわち、語りつつある言葉の使用の場面において、言語と知覚している世界との間に相互的な影響関係(②)が指摘されていること。そして、語りつつある言葉によって、発話する主体にとってはその手段が自明視されており(①)、またそれだけでなく主体が言い当てようとする内容も、非定立的なものとして自明視されているということ(③)である。この三点目について更に言い換えれば、知覚や、ただ語られていないこと(無音や白紙)とは全く別の種類の、非定立的で黙した領域が創造的な言語行為において存在するということである。

この解釈を沈黙という論点から記述し直すならば、次のように述べることができるだろう。

すなわち、語る主体は語られた言葉の集積としてのラングの体系[註8]を意識することなく用いる(沈黙A[①])。その主体は、文化的既得物からの影響に浸されてもいる定立以前的な知覚[沈黙B[②]]において見たり経験したりする。そして、発話や執筆中にそれ自身が形成されるような仕方で、未だ語られていないこと(沈黙C[③])を語る。そのような、主体において未だ語られていないことを語る場面では、風景からの秩序の出現と人間による言語的・文化的な風景の分節化、及び、すでに語られた言語的所与と未だ存在しきっていない語りつつある言葉による言語とが拮抗する。すなわち「語りつつある言葉」とは、これら三種の沈黙――言語表現の手段となる文法規約等の言語的沈澱、言語・文化的影響を受けてもいる知覚、そして未だ語られていないことの間でのダイナミズムにおいて実現されるものである。ここで我々は、この未だ語られておらず、言い当てようとされ

る内容としての沈黙Cのみが、未だ存在していないということ、あるいはより正確に言えば、未だ存在者になりきっていないということに、改めて注意を促したい。

以上から、語りつつある言葉の使用の場面には三つの沈黙と呼びうるような性格が認められることが導かれた。ここから、さらにこの沈黙（無言の世界）という概念の性格を検討するために、これまで沈黙としては取り上げられることの少なかった文化的既得物としての側面［註9］を、生活世界との関係から考察しよう。

2 沈黙の世界の二義性

語りつつある言葉によって沈黙（無言の世界）から言語への移行を実現するという事態は、メルロ＝ポンティ自身が「沈黙の世界は、まさしく主題化されない生活世界（Lebenswelt）として」（VI, 222/239）存在すると述べているように、生活世界への還帰という哲学的企図と重ねて論じることができるものでもある［註10］。本節では、沈黙の世界と生活世界とが単に方向性を同じくする問題系であるのみならず、両者の様態において共通点があるということを提示する。その上で、沈黙の世界の内実を改めて規定し、「沈黙の世界による前言語と言語の裏打ち」という事態を読解する足掛かりとする。

生活世界とは、一方では現象学的還元によって開示される根源的な世界地平であるとともに、他方では、知覚世界を含む還元の施されるべき存在者全体を包括するような、全体的かつ歴史的・文化的世界であるという二義性［註11］を有するものであった。ところでメルロ＝ポンティは『見えるものと見えないもの』１９５９年1月の研究ノートにおいて、知覚される世界と哲学との関係を論じ、次のように述べている。

> 我々が語ったことや我々が語ることの全てが沈黙の世界を含意していたし、含意しているのである。沈黙の世界は、まさしく主題化されない生活世界としてそこにあったのである。それ〔沈黙の世界〕は、ある意味では、それ〔沈黙の世界〕を記述する言表（énoncé）そのものによってさえやはり、主題化されていないものとして含意されているのだ。なぜならそうした〔沈黙を記述する〕言表そのものもそれはそれで沈殿させられ、生活世界によって「取り戻され」、それらの言表が生活世界を包含するというよりも、むしろそれらの言表が生活世界のうちに包含されることになるからであり、それらの言表があらゆる自明性を言外に含んでいる以上、それらの言表は生活世界のうちにすでに包含されてしまっているからである（VI, 222/239）。

この記述を我々は、次のように解釈することができる。すなわち、沈黙の世界を記述する言表は、すでに語られ、沈殿した言語的既得物という自明性を土台に成立する以上、その言表は沈黙の世界を含意する。次いでその言表も、発せられ、間主観的獲得物となることで、沈黙の世界の一部となる。言表行為における自明な前提と、言表の沈澱の、言表それ自体との循環関係を認めることによって、沈黙の世界には生活世界と同様の二重性が存すると指摘することができるのである。以上から、沈黙の世界と生活世界とが同様の構造を持つ二義的なものであり、また沈黙の世界が少なくとも言語論の文脈においては生活世界と同一視されていることは明らかだろう。すなわち、沈黙とは語られるべきものであり、かつ、すでに語られたものである。

前節からの議論を引き受ければ、この言表が含む「自明性」とは、主体が言語的表現行為を遂行するにおいて自明視される文法規約や既存の意味体系といった表現の「手段」を指す。こう解釈することによって、世界地平が文化的世界に包み込まれているのと同様に、言葉は沈黙に包まれていると述べることができるのである。

3 「前言語」の位置づけとその意義

以上から、発話行為における「沈黙（無言の世界）」が、三つの要素から構成されること、そして、言語行為における「沈黙」が「生活世界」と同様に言語的沈澱を含むものであることが確認された。三要素とはそれぞれ、第一に、自明なものとして用いることのできる文法規約を含む言語的所与（沈黙A）、第二に、言語・文化的な諸所与の侵襲を既に受けている風景の知覚（沈黙B）、そして第三に、「前言語」と名指される、未だ語られていないが語られようとしている意味（沈黙C）の三点である。その過程で我々は、言語的達成と沈黙が相互包摂的な関係にあることを、生活世界の二義性と照応する仕方で解釈した。以上の議論を踏まえた上で、冒頭に我々が提起した「前言語」の位置付けと意義を確定していこう。再度引用しよう。

> 哲学それ自身が言語（langage）であり、言語に基づいている。だが、だからといって哲学は、言語について語る資格を失うわけでも、前言語（pré-langage）、そして言語と前言語を裏打ち（doubler）するところの無言の世界（monde muet）について語る資格を失うわけでもない（VI, 166/175）。

この引用から我々は、無言の世界は、言語のみならず、「前言語」と呼ばれるものも下支えしていることを読み取ることができる。前言語は言語の手前に位置するものとして言語から区別されるものであり、かつ、無言の世界を前提とする。前言語とは無言の世界と言語との間に位置づけられるものであり、メルロ＝ポンティ哲学の議論の対象でもある。

第一節の議論より、沈黙から言語への移行を実現するものは語りつつある言葉と呼ばれる言葉なのであった。

第一節、第二節での議論を総合的にまとめることによって、「前言語」の位置付け、及び沈黙について、次のように解釈することができるだろう。

前提として、言語はラングや既存の意味といった言語的沈澱（沈黙A）に裏付けられる。すなわちある言表は、それら言語的既得物を前提とし、また間接的に指示することによって、有意味なものとして実現される。沈黙を語る言語（「語りつつある言葉」）もまた、そのような言語的既得物を前提としながらも、今・ここの私の身体において生じ、文化的・歴史的所与の影響を受けてもいる非定立的な知覚（沈黙B）に基づいて、未だ十全には実現されていないもの（沈黙C）を語っていく。このように、非定立的知覚としての沈黙と、言語的所与としての沈黙の両者を、無言の世界の内実として理解すれば、言語の手前に位置し、無言の世界を前提とする「前言語」が、「未だ十全には実現されていないが語られつつあるもの」を指すことが帰結する。

語りの場面において、ラングを含む言語的所与と風景の非定立的知覚とが循環的な影響・包含関係を持つ。そのような語りつつある言葉は、「前言語」なるものを言語へと実現してゆく。そうであるとすれば、言語論においてこのような不完全な存在者を措定することは、メルロ＝ポンティ哲学においてどのような意義を有すると言えるだろうか。

本稿が取り組むべき最後の課題は、無言の世界と言語の世界の媒介を果たす「前言語」の内実と、その哲学的意義を明らかにすることである。

メルロ＝ポンティは１９５９年９月の研究ノート「知覚しつつある主体、語りつつある主体、思考しつつある主体」において、哲学者自身でもあるような語りつつある主体とその言語行為について次のように述べている。

> 語りつつある主体、それはある実践（*praxis*）の主体である。この主体は、語られ、理解される言葉を、思考の対象ないし観念的対象として己の前に有しているのではない。それが言葉を所有しているのは、私の身

体が、その赴かんとする場所を予持（*Vorhabe*）しているというのと同じ種類のある予持によってでしかない。言い換えれば、語りつつある主体とは、これこれ特定のシニフィアン（rel ou tel signifiant）のある種の欠如体（un certain manque）に他ならない［…］したがって、ここにあるのは新たな目的論である［…］（VI, 251-252/288）。

我々がすでに確認し、またここでも改めて語られるように、語りつつある主体は自らの語ろうとする内容をすでに十全な仕方で保有し、それを言語に翻訳していくわけではない。むしろ、語りつつある最中の彼（女）は、彼（女）自身、語られるべき内容の「欠如体」となってしまう。この主体の「語り」は、「新たな目的論」であるような一種の予持［註12］を通して実現される。「これこれ特定のシニフィアン（rel ou tel signifiant）」の欠如、すなわち未だそれとして十全には保有されていないが、言い当てられることが予期されているこの特殊な状態こそが、まさしく現在議論している「前言語」である。あたかも身体が意識せずとも自らをある場所に赴かせるがごとく、語る主体は、自らが埋められるべき「前言語」のような欠如体として、シニフィアンを予期しながら語るのである。このような「先取り（préposession）の力」（VI, 137/143）のために、我々は自らが十全な仕方で理解しているわけではないこと、知りつつあることを語ることができるのであり、このような語りつつある言葉は「自分がその一部をなすようなひとつの個体発生（ontogenèse）を表現している」（VI, 137/143）とさえ呼ばれる。この「未だ完全には存在しきっていない存在者」という特殊な存在様態を起点に、文化的既得物や主体の知覚との交流を通して実現される言語論は、発生論でもあるのである。

このような、それが何であるかを正確に把握しない「前言語」を認め、予持を通してそれを実現するという事態（「個体発生」）を、メルロ＝ポンティの言語論であり発生論と解釈しよう。そのような、予期された発生の起点を、「前言語」という未だ存在せざる、生成しつつある存在者に置くことは何を意味することになるのだろうか。「前言語」が、文化的・歴史的既得物を背景にした上でなお措定され得るのだとすれば、つまり既存の意味や文

法体系に「未だ語られておらず、語られることが予期されるものとしての前言語」が理論的に担保されているのだとすれば、この審級は次のような意義を持つと考えられるだろう。すなわち、沈黙から言語への移行を無からの自在な操作とは区別されるものとして提示することができること、しかしながら同時に、歴史的・文化的な働きかけに全面的に規定されることがない創出、発生を、理論的に肯定することができるということである。それゆえに我々は、「前言語」という審級を設定することで、沈黙と言語という二分法が調停されるような場面へと、そして言語・文化的沈澱を踏まえた上でその外部へと、議論の歩みを進めることができる。この「前言語」という概念は、時に「沈黙」や「欠如体」といった語で言い換えられ、メルロ＝ポンティの著作全体を通しても多くは見られることがない語ではある。しかしながら、この概念に忠実に寄り添い解釈することによって逆説的に我々は、後期メルロ＝ポンティの言語論を、とりわけ難解とされる「沈黙」の概念とともに、理解することが可能となるだろう。

終わりに

本稿では、まず従来二項関係として整理されることの多かった沈黙と言語の関係を、第三項としての「前言語」についての記述の注釈を通して再検討した。それによって、「沈黙」ないし「無言の世界」を、従来理解されてきた「非定立的知覚」という特徴に加え、言語的既得物（沈殿）、そして未だ存在していないが予期的に語られるもの（前言語）という三つの要素から構成されるものとして解釈した。語りつつある言葉が作動する場面においては、沈黙は生活世界の二義性と照応する二義性、すなわち、反省的に定立される以前の知覚と、語る水準において前提とされる言語的既得物という二つの性質が認められる。注意しておきたいのは、知覚の水準においてもま

た、言語的既得物を含む文化的所与と風景とが相互的な影響関係にあるとされていることであり、それにも関わらず、既存の言語や文化の外部にあると思しき「前言語」が、語るべきものとして生じるということである。そうした「前言語」は、語りつつある言葉によって実現される「言語」の前提として機能している。そこでは、前言語と呼ばれる審級が「未だ生成しきっていない存在者」という、ある特殊な存在様態に置かれ、まさしく語ることによってそれは「言語」として実現されるのである。

以上の議論を鑑みれば、この「前言語」という地点では、沈黙と言語という二分法からの脱却が起こっていることが理解される。言語的発生の起点を、沈黙と言語の交点（「前言語」）に措定することによって、包含関係に巻き込まれているがゆえに主題化において常に大きな困難を孕む「沈黙の世界」の主題化が可能となるからである。言い換えれば、沈黙と言語という二極の接合する地点にアクセスすることによって、沈黙／言語という不可能な二項対立から抜け出すことが可能となるのである。また同時に、人が文化的蓄積という「無言の世界」に依存しつつもそれに全面的に規定されるわけではなく、むしろ語ることは可能であることが、理論的に担保されているということも帰結する。そうしたメルロ＝ポンティの後期言語論が、メルロ＝ポンティの発生論とも接続されることを示唆し、本稿を終えることとする。

注

［1］この点を指摘した先行研究は数多く存在しているが、例えば、Noble, Stephen（*Silence et langage : Genèse de la phénoménologie de Merleau-Ponty au seuil de l'ontologie*, Brill, 2014, p.192）やKristensen, Stefan（*Parole et subjectivité : Merleau-Ponty et la phénoménologie de l'expression*, 2010, p.259）はこの問題を移行として、加國尚志（「沈黙の詩法」、『思想』第1015号、2008年、28-46頁、30頁）は両者を循環関係として整理する。

［2］本論文では、« parole »を「言葉」、« langage »を「言語」、« langue »を「ラング」と訳出した。なお、「語りつつある」という訳語は加國（前掲論文）を踏襲した。

［3］メルロ＝ポンティにおける沈黙は、少なくとも『見えるものと見えないもの』に代表される後期哲学に限定すれば、前反省的で根源的な知覚経験を指す「知覚の沈黙」（VI, 316/397）と、言葉がそこに混ぜあわされ、「言語を包み続け」（VI, 230/252）るような、言語行為を通して見出される沈黙とが、関係するとは言え区別されてきた。前者は、例えばBimbnet（*Nature et humanité – le problème anthropologique dans l'œuvre de Merleau-Ponty*, Vrin, 2004, p.233）の指摘にあるように、主観の経験であり知覚ないし知覚的世界を指す。しかし、本論でいっそう問題となる後者の沈黙の解釈には異同が存在する。例えば、対話における過剰な饒舌と対比されるような、話者の真意を表現するための効果的間合い（Masset, Pierre, « La parole et le silence », *Le langage*, 13ème congrès des sociétés de philosophe de langue français I, Section I B（L'expression, le dialogue, les limites de l'expression）, 1966, p.76）や、存在者がそこで存在するための絶対的なる非存在（Solère, Jean-Luc, « Silence et philosophie », *Revue Philosophique de Louvain*, 14ème série, tome 103, n 4, 2005, p.618）、言語が実現された後に措定されるところの懐古的錯覚（Stefan Kristensen, « Foi perceptive et foi expressive », *Chiasmi international*, n°5, 2003, pp.259-282, p.275）、常に語られるという可能性をはらんだ（prégnante）もの（Noble, Stephen, *Silence et langage : Genèse de la phénoménologie de Merleau-Ponty au seuil de l'ontologie*, Brill, 2014, p.247）など。しかし本稿は、上記の先行研究とは異なり、沈澱として解釈する。

［4］本論では、「沈黙（silence）」「沈黙の世界（monde silencieux）」「無言の世界（monde muet）」といった言葉を区別なく用いるが、文章中では混乱を避けるために「沈黙」という語を中心に使用する。

［5］この区別は『知覚の現象学』以来のものであり、『見えるものと見えないもの』においても基本図式は引き継いでいると考えられる。二次的言語、語られた言葉、経験的言語に対し、一次的言語、語りつつある言葉、超越論的言語が対比される。この点については、Landes, Donald, *Merleau-Ponty and the paradoxes of expression*, Bloomsbury, 2013を参照。

［6］こうした、知覚された風景の自発的形態化という議論は、当然、知覚それ自体が自ら形態化する全体化の原理が備わっているとする『知覚の現象学』での「現象野」の分析を引き受けたものだろう。しかしながら、『見えるものと見えないもの』において、ここでの「無言の風景の分節」と呼ばれるものが、経験によって獲得された「文化による知覚の形成作用」（VI, 265）と呼ばれるものであるか、あるいは制度化された知覚に先行する「野生の知覚」に含ま

れる働きであるかどうかは、極めて重要な論点ではあるが、稿を改めて検討することにしたい。

[7] ここでの「交流（échange）」の解釈は、すなわち、主体が風景へと開かれ、風景を一方的に分節化するわけではなく風景からも規定を受けるという解釈は、主体の諸感覚器官が事物の構造に開かれることで感覚的なものと互いに関わり合うという、『知覚の現象学』における議論（「感覚とは共存あるいはコミュニオンに他ならない」（PhP, 243-245/15））を引き受けるものであるだろう。

[8] 語りつつある言葉がラングを構成するという点については、次のような記述からも明らかである。「まさしく言葉（parole）こそが意味作用としての、またその意味作用の主体としての私の前にある意思疎通（communication）の場、ある間主観的な弁別体系、現在系のラング［…］を構成するのだ。」（VI, 227/248）

[9] Edie, James M. は、沈黙とは「第一義的には言葉（speech）を可能にし、全ての言葉の背景でもあるラングである」（*Speaking and meaning: The phenomenology of language*, Indiana University Press, 1976, p.103）ことを指摘している。しかしながら彼の沈黙理解は、次の理由から不充分であるように思われる。彼は、言葉の意味とは「概念的思考の領域という超越論的な沈黙」に常に逃れてしまうことで（*ibid.*, p.103）、常に言語表現では捉え損なうものであって、更に各言葉を「言葉それ自体が参照するところのイデア性」（*ibid.*, p.106）を反映したものへと縮減して解釈する。すなわち、言語表現に翻訳されるべき（そして常に「言葉を逃れる」）真正なる原本のような領域を想定し、それを沈黙として規定するのである。しかしながらすでに我々が論じたように、語られるべき意味とは語りつつあるなかで自らの形をなすものであって、イデア的で超越論的な領域に居座り続けるものだと見なすべきではないだろう。

[10] 時期は先行するが、１９５１年に行われた第一回国際現象学会議（ブリュッセル、１９５１年）での報告「言語の現象学について」（１９５２年に刊行された会議記録である『現象学のアクチュアルな諸問題』に収録され、その後『シーニュ』（１９６０年）に収録）においても、「客観化された言語から言葉（parole）への還帰」（S, 112/145）が「生活世界（Lebenswelt）への還帰」（S, 112/145）というプロジェクトの核心をなすと読み得る記述がある。

[11] 生活世界とその二義性に関しては、ウルリッヒ・クレスゲス、「フッサールの〈生活世界〉概念に含まれる二義性」（『現象学の根本問題【現代哲学の根本問題】第８巻』（新田義弘・小田侃訳）、昇洋書房、１９７８年、81-104頁）を参照した。

[12] 時期は遡るが、１９５１年から１９５２年頃に書かれたとされる「アルゴリズムと言語の秘儀」（クロード・ル

フォール編の遺稿集『世界の散文』（１９６９年）に収録）において、「真なるものの先在」、即ちある判断や帰結を真なるものと認めた場合にそれが始めから真であったと解釈する懐古的錯覚とは異なるあり方として、「予持（Vorhabe）」や「予描（prétracer）」、「予告（annoncer）」、「予科（anticiper）」、といった語が用いてられており、ここで挙げられる「新たな目的論」の萌芽を読み取ることができる。例えば、次の文章を参照。「それらの帰結は、私の思考の生成のうちに巻き込まれている開かれた体系としての構造のうちに予描されていたにすぎない［…］。」（PM, 178/169）「真理は合致ではなく、予科であり、とりあげなおしであり、意味の滑り変化なのであって、一種の隔たりの中でしか触れられないものなのだ。［…］言葉（parole）は［…］真理へ向かう我々の運動の媒体なのである。」（PM, 180-181/172）こうした予期や予科を、「新たな目的論」と名づけることの意義については、別稿の課題となるだろう。

文献表

メルロ＝ポンティの著作と略号

（メルロ＝ポンティの著作からの引用は末尾に記載した略号で指示し、スラッシュの前後に原著／邦訳の頁数を記す。略号の後に数字の指示が一つしかない場合は原著の頁数を指す。）

PhP : *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945.（『知覚の現象学』第二巻、竹内芳朗・木田元・宮本忠雄訳、みすず書房、１９７４年）

S : *Signe*, Paris, Gallimard, 1960

（『シーニュ 1』竹内芳朗・粟津則雄・木田元・滝浦静雄・海老坂武訳、みすず書房、１９７０年［１９６９年］）

SNS : *Sens et Non-Sens*, Paris, Nagel, 1966

（『意味と無意味』滝浦静雄・木田元・粟津則雄・海老坂武共訳、みすず書房、１９８２年）

PM : *Le prose du monde*, Paris, Gallimard, 1969

（『世界の散文』滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、１９７９年）

VI : *Le visible et l'invisible*, Paris, Gallimard, 1964

（『見えるものと見えないもの　付・研究ノート』滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、２０１８年〔２０１７年新装版〕）

その他の文献

Barbaras, Renaud, *De l'être du phénomène. Sur l'ontologie de Merleau-Ponty*, Millon, 1993

Bimbnet, Étienne, *Nature et humanité -- le problème anthropologique dans l'œuvre de Merleau-Ponty*, Vrin, 2004

Edie, James M. *Speaking and meaning: The phenomenology of language*, Indiana University Press, 1976

Kristensen, Stefan, « Foi perceptive et foi expressive », *Chiasmi international*, n°5, 2003. pp. 259-282.

Kristensen, Stefan, *Parole et subjectivité : Merleau-Ponty et la phénoménologie de l'expression.*, Vrin, 2010

Landes, Donald, *Merleau-Ponty and the paradoxes of expression*, Bloomsbury, 2013

Masset, Pierre, « La parole et le silence », *Le langage*, 13ème congrès des sociétés de philosophe de langue français I, Section I B(L'expression, le dialogue, les limites de l'expression), 1966, pp.74-77

Noble, Stephen, *Silence et langage : Genèse de la phénoménologie de Merleau-Ponty au seuil de l'ontologie*, Brill, 2014

Solère, Jean-Luc, « Silence et philosophie », *Revue Philosophique de Louvain*, 14ème série, tome 103, n°4, 2005, pp.613-637

ウルリッヒ・クレスゲス（新田義弘・小田侃訳）、「フッサールの〈生活世界〉概念に含まれる二義性」、『現象学の根本問題【現代哲学の根本問題】第８巻』、昇洋書房、１９７８年、81-104頁

加國尚志、「沈黙の詩法」、『思想』、第１０１５号、２００８年、28-46頁

加國尚志、「野生の知覚、なまの知覚　――後期メルロ＝ポンティの「研究ノート」における知覚経験の位相――」、『立命館文学』、第６６５巻、２０２０年、890-900頁

河野哲也、「メルロ＝ポンティにおける物の超越性」、『哲學』、第89号、１９８９年、25-46頁

河野哲也、『メルロ＝ポンティの意味論』、創文社、２０００年

佐野泰之、「メルロ＝ポンティにおける〈語られた言葉〉の問題」、『メルロ＝ポンティ研究』、第19号、２０１５年、16-30頁

廣瀬浩司、「自然と制度」、『メルロ＝ポンティ研究』、第4号、1998年、25-48頁